



李賀詩研究：
竹を詠じた詩を中心として(二〇一〇年度卒業論文要
旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 健太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007388

本研究は、中唐の詩人、李賀（七九一—八一七）の詩について、特に竹に着目して考察したものである。研究方法として、まずは李賀詩の竹の用例を摘出し、それが意味するところの相違によって分類した。さらに唐代以前の詩賦における竹のイメージと比較し、李賀の詠じた竹の特徴を探った。

李賀詩の竹は大きく分けて四つに分類できる。一つ目は「詠物の対象としての〈竹〉」である。李賀は六朝齊代に始まった詠竹詩の伝統を継承しながらも、竹でできた冠を貴顕の者に献上したいと詠い、仕官への望みを表現していた。二つ目は「女性描写にまつわる〈竹〉」である。ここでは竹にまつわる貞節の固さのイメージを利用しながら、男性と離別している女性の悲哀や嘆きと対比させていた。服飾表現の一種である「竹葉」にもそれが見えた。三つ目は「故郷昌谷にまつわる〈竹〉」で、李賀は竹に望郷の念を仮託しており、「竹根」という言葉にもそれがうかがえた。四つ目は「李賀の不遇感と〈竹〉」である。例えば竹を素材とする鞭には、科擧に登第できない不遇な状況を託していた。このように、李賀の竹にはいくつかの側面が認められたが、それらは竹の詩に限らず、李賀詩全体の看過できない重要なテーマとも重なる。このことは、李賀詩における竹の不可欠さ、また竹に仮託したイメージの豊富さを物語っているのだ。